

【バンダアチェ(インドネシア) 岸名章友】インド洋大津波の発生から二十六日で二カ月。最大の被災地、インドネシア・スマトラ島のバンダアチェ市で、日本人医師がボランティアで医療活動を続けている。

津波から一カ月を迎えた現地は感染症対策が大きな課題。阪神大震災やトルコ地震など数多くの災害医療に携わってきた医師は、巡回診療やワクチン注射などに奔走している。

不衛生な病院／ままならぬ診察

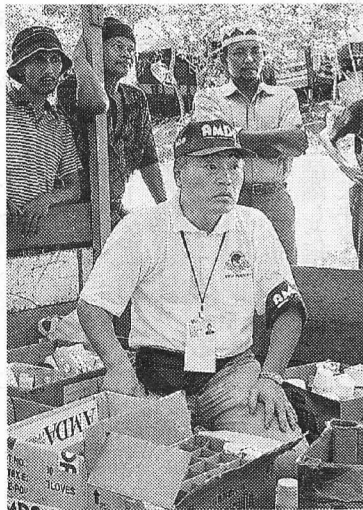
バンダアチェ

うだるような暑さの中、国際医療ボランティア組織「AMDA」(岡山市)メンバーで米デューク大助教授の高橋医師(54)らの医療チームが二十五日、バンダアチェ市郊外の山のふもとにある避難所を訪れた。

広さ約十平方メートルほどの山小屋を仮設診療所とし、抗生物質や痛み止めなど、約五十種類の医薬品を段ボール詰めにして持ち込んだ。

沖縄県豊見城市の看護師、大城七子さん(47)が被災者の血圧を測って症状を聞く。高橋さんが薬を選び渡していく。「アリガト」。被災者は日本語で感謝の言葉を口にす

医療なき被災地 日本人医師走る



この避難所では住まいを失った約四百世帯が、テントで生活する。暑さ、湿気、不衛生な住環境という悪条件が重なり、湿疹(しっしん)など皮膚の異状を訴える子供が絶えない。教師のイルワングディさん(26)は「きれいな飲み水も蚊帳もない。困難な生活をしてい

るだけに、こうした支援はありがたい」と話す。水たまりでボウフラが育って蚊が大量発生し馬拉リアがまん延する恐れも指摘される。「緊急医療が必要な時期は過ぎた。これからは慢性疾患や感染症への対応が重要」と高橋さんは言う。

インド洋大津波1カ月

高橋さんと大城さん

避難所を巡回し、医薬品などを配る高橋医師(25日、インドネシア・バンダアチェ郊外)＝写真 岸名章友

「感染症対策、今後は重要」

は、インドネシアの医師らとともに、午前中は市内のモスクなどではしかのワクチン接種を行い、午後は医者はいないへき地の被災地を巡回する。

高橋さんによると、バンダアチェ市の医療機能は著しく低下している。市内有数規模の病院でさえ四百人いた医師・看護師のうち、半数以上が津波で亡くなり、診察がままならない。開いている病院もトイレの汚れがひどいなど、衛生状態は最悪。山岳地に逃れた被災者らには通う病院も医師もない。「もっと医師を増やさないと」と高橋さんは声を強める。

高橋さんが災害医療支援にかかわるようになったのは阪神大震災から。その後もアルバニア、トルコへと飛び、被災者を手助けしてきた。高橋さんは「どんな場所でも人を助けたいという目的は一つ。どこへでも飛んでいきたい」と話している。